

『己亥雜詩』に現れた龔自珍の「落花」意識

竹 村 則 行

な情感を示したものとして重要な意味を持つ。

② 其二六から其四三に至る十八首は、京師の友人知人との別れに臨んで詠んだ留別詩である。

③ 其四四から其五三に至る十首は、官僚としての己の活動を回顧したものである。

④ 其五四から其八二に至る二九首は、學者としての己の著述を振り返ったものである。

⑤ 其八三から其一四八に至る六六首は、南下の途中で立ち寄った淮浦・袁浦・揚州等の江南の名勝地における龔自珍の行動の記録である。

⑥ 其一四九から其一九七に至る四九首は、杭州に歸郷した龔自珍が嚴父に對面し、舊友と再會した時の感懷をうたったものである。この中、其一一八から其一九七に至る十六首は、今は亡き故人を追憶して詠んだ追悼詩である。

⑦ 其一九八から其二三三に至る三六首は、新たに住むことになる崑山の別荘「羽跨山莊」の手入れをしながら、北行の準備をする龔自珍の氣持をうたったものである。

⑧ 其二三四から其二四四に至る十一首は、家族を迎えに龔自珍が

一八三九（道光十九）年己亥四月、龔自珍は廿餘年の官僚生活に終止符を打ち、ひとまず南へ出て故郷の杭州に隱居する父を見舞う。ついで北上し、京師に残した眷族を迎えて再南下した後、その年の十二月、新たな人生を送るべく江南の崑山に旅装を解く。この間半年餘にわたる旅途の種々の場において、友人との離別あれば知人との再會あり、社會への憤懣あれば自己への追憶ありというように、文字通り雑多な感興を龔自珍が集中的に詠み込むことによって『己亥雜詩』七絶三一五首は成立した。親友の吳葆晉に宛てた手紙によれば、龔自珍が旅の途中の感興を旅館の雞毛筆を用いて帳簿紙に書きつけ、文袋中に投げこんでおいたものがその草稿となったものだという。この草稿は、旅終えて後に龔自珍の手によって整理再構成され、今日の『己亥雜詩』となったが、その構成は私の見るところ次の通りである。

① 其一から其二五に至る二五首は、出都直前及び直後の感懷を記したものである。この中、其一から「己亥の歲四月二十三日を以て出都す。」と自注する其十に至る冒頭の十首は、龔自珍が旅立ちにあたって胸中に湧き起こる感動を述べており、『己亥雜詩』全體の總序的

いよいよ京師に向けて旅立つ際の感懐を述べたものである。

⑨ 其二四五から其二七一に至る二七首は、再度立ち寄った袁浦にあつて「醉夢の時多く、醒めたる時少き」まさに「寤詞」（醉言）を述べ立てたものである。

⑩ 其二七二から其二九八に至る二七首は、山東の曲阜を經由しての北行道中の記録である。

⑪ 其二九九から其三一五に至る十七首は、京師付近で家族と合流した龔自珍が、再南下して崑山の別荘に落ち着くまでの経緯を記したものである。

私は『己亥雜詩』の持つこのような成立の背景と構成とに鑑み、そこに一貫して流れる龔自珍の落魄意識を巧まずして見事に象徴したものととして「落花」（落紅）の詩語表現を取りあげたい。すなわち其三の「終に是れ落花の心緒好し」、及び其五の「落紅は無情の物ならず化して春泥と作り更に花を護らん」がそれであり、いずれも總序的な情感を述べたとおぼしき冒頭の十首中に現れる表現である。

一體ここに述べられる「落花」とは具體的に龔自珍のどのような意識感情を表明したものなのか。更には、龔自珍のこのような「落花」の意識は、彼が生きた當時の社會狀況の推移の中では果してどのように位置付けられ得るのか。私は小論において以上の問題を念頭におきつつ、その考察を通して、三一五首の多くを敷え、量質共に明らかに一つの宇宙世界を形成する『己亥雜詩』の持つ詩の世界の總體的な意義を明らかにしてゆきたいと思う。

二

龔自珍がその詩において花への好みを最も早く示すのは「因憶」

（二九歳作）である。この詩で彼は、八歳の頃に住んでいた北京斜街の自宅にあった山桃の花について「亦具看花眼」（亦た看花の眼を具す）と歌い、また十三歳の年に移り住んだ北京横街の自宅で見えた槐の花の見事さについては「槐花五丈青」（槐花五丈青し）と詠む。次いで十三歳の年に家庭教師の宋璠（一七七八—一八一〇）の命によって作られた「水僊華賦」では、その書出しの「一仙子有り 其れ何處に居らん 是れ幻にして眞に非ず 水涯に降る…」からも伺い知れるように、端麗で清楚な趣きを漂わせる水仙花の形態が淡い情感を込めて描かれている。ここにあげた「因憶」「水僊華賦」の二例からみて、龔自珍が少年の頃から既に花に對して格別に深い關心と興味を抱いていたことがわかるであろう。

龔自珍の詞では、今日傳わる一四九闋のほとんど全てにわたって夥しく所謂花鳥風月の素材が詠み込まれている。この現象は、詞の様式は花を好む彼の感情を填めるのにびつたり器だったことを豫想させる。しかしながら素材として花鳥風月を詠むことは、もとより詞の發生以來歴代の詞人がおしなべてそうであったのであり、これを直ちに龔自珍のみに顯著な現象であるということはできない。

その他の詩篇においても、彼は往々花を素材にした詩を詠んでいる。それらの数多い花の中で、彼がとりわけ好んで詠んだ花は一體何の花であったらうか。龔自珍の詩篇を見るに、詩人一般の常として彼が山桃や梅を始めとして幾多の花を愛したことは言うまでもないが、特に彼が大きな關心と共感を持って詠んだ花は海棠の花であったらう。以下にあげる詩例がこれを明らかにする。

まず、「城北廢園將起屋、雜花當楨、施斧斤焉。與馮舍人啓泰過而哀之、主人諾、馮得桃、餘得海棠、作救花僞示舍人」という長い題を

持つ次の詩は、家屋の新築に當つて舊園の雑花が刈り取られようとす
る場に偶然行き會わせた眞自珍が、雑花の中で特に海棠の花を譲り受
け、「救花偈」を詠んでその薄命を悼んだものである。

門外閒停油壁車 門外に閒らく停む油壁の車

門中雙玉降臣家 門中 玉を雙ぶ降臣の家

因縁指點當如是 因縁の指點 當に是の如く

救得人間薄命花 人間の薄命の花を救ひ得たり

友人は桃花を請い受けたのに對し、眞自珍は數ある雑花の中でこと
さらに海棠の花を譲り受けたことに注目したい。彼は「因縁」とい
い、「救得人間薄命花」と表現しつつ、人間世界に暫く咲く美人薄命
の海棠花の生命を自らの手によって救つたことに因縁の必然性を感じ
るのである。

次いで京師の晩春、大雨の夕べに所懐を記した詩「京師春盡夕、大
雨書懷、曉起東比鄰李太守威、吳舍人嵩梁」においては、「閉門三日
欲腸斷 山桃海棠落皆半」(門を閉つること三日にして腸斷せんとす、山桃
海棠は落つること皆半ばならん)というように、春雨に封じ込められて
無聊の餘り、この大雨で海棠の花は半ば落ちただろうと遙かに海棠に
思いを寄せる眞自珍がいる。

また、棗花寺の海棠の下では次のように惜春の歌をうたう(「棗花寺
海棠下感春而作」)。

詞流百輩花間盡 詞流百輩 花間に盡き

此是宜南掌故花 此れは是れ宜南掌故の花

大隱金門不歸去 大隱は金門より歸り去らず

又來蕭寺問年華 又蕭寺に來たりて年華を問う

棗花寺は京師の右安門内にある崇効寺のこと。もと唐の劉濟の「捨

宅」であった。「棗花」の雅名は清の王士禛(二六三四—一七二一)の
命名であった。眞自珍はこの寺の海棠の下に幾多の友人と集い、海棠
に感じて行く春を愛惜するのである。

更には、小字を菩薩といった遼の聖宗の第十女の墳墓をうたつた
「菩薩墳」の序においては、「北方に海棠少く、此の地始めて之を生
う。是より海棠の盛なるは江國に逾ゆ。土人因りて海棠を以て主に諡
すと云ふ。」というように、北方に海棠が盛んに植えられるようにな
つた由来を述べ、又本文においては「南朝人未識 拜殺斷腸花」(南朝
人未だ識らず、斷腸花を拜殺す)と描寫して、「斷腸花」の異名を持つ海
棠花にまつわる悲哀をうたいあげている。

續いて「滅蘭」「鳳凰臺上憶吹簫」等の詞作品において、彼が京師
の憫忠寺や花之寺における海棠花下での文宴をたびたび追憶してい
るのは、やはり彼の海棠に寄せる深い愛情を示すものである。

そしてこれらの海棠をうたつた詩の中で、眞自珍が最も巧みに且つ
思想的な深みを以て海棠への共感を見事にうたいあげたものが、次に
あげる「西郊落花歌」に外ならない。

豐宜門を出づること一里にして海棠の大きき十圍の者八九十本
あり。花時は車馬太だ盛なれば未だ嘗て過らず。三月二十六日
に大風ふき、明日風少や定まる。則ち金禮部應城・汪孝廉潭・
朱上舍祖毅・家弟の自毅と偕に城を出て飲み、而して此の作有
り。

西郊落花天下奇 西郊の落花は天下の奇

古來但賦傷春詩 古來但だ賦す傷春の詩

西郊車馬一朝盡 西郊に車馬一朝盡くれれば

定盒先生沽酒來賞之 定盒先生 酒を沽い來りて之を賞す

先生探春人不覺

先生 春を探ぬるに人覺らず

先生送春人又囓

先生 春を送るに人又啣う

呼朋亦得三四子

朋を呼べば亦三四子を得

出城失色神皆癡

城を出づれば色を失い神皆癡たり

如錢唐潮夜澎湃

錢唐の潮の夜に澎湃たるが如く

如昆陽戰長披靡

昆陽の戰の晨に披靡するが如し

如八萬四千元女洗臉罷

八萬四千の天女 臉を洗い罷りて

齊向此地傾胭脂

齊に此の地に胭脂を傾くるが如し

奇龍怪鳳愛漂泊

奇龍怪鳳 漂泊するを愛べるに

琴高之鯉何反欲上天爲

琴高の鯉 何ぞ反つて上天せんと欲するを爲すや

玉皇宮中空若洗

玉皇宮中は空しきこと洗うが如く

三十六界無一青蛾眉

三十六界に一の青蛾眉も無からん

又如先生平生之憂患

又先生平生の憂患

恍惚怪誕百出難窮期

恍惚として怪誕百出して窮期難きが如し

先生讀書盡三藏

先生 書を讀みては三藏を盡し

最喜維摩卷裏多清詞

最も喜ぶ 維摩卷裏に清詞多きを

又聞淨土落花深四寸

又淨土の落花 深さ四寸と聞けば

冥目觀想尤神馳

冥目觀想して尤も神馳す

西方淨國未可到

西方の淨國 未だ到るべからざるも

下筆綺語何滴滴

筆を下げば綺語の何ぞ滴滴たる

安得樹有不盡之花更雨新好者

安んぞ得ん 樹に不盡の花の更に新しく好き者を雨らす有りて

三百六十日長是落花時

三百六十日 長に是れ落花の時なるを

龔自珍の花見は、世人一般のように満開の海棠の花見ではない。花

の盛りも過ぎ、人馬も絶えた頃、彼はやおら海棠の落花を見物に行くのである。彼は道教の神仙世界あるいは佛教の淨土思想に藉りて、海棠花の落花狼籍たる様を、まるで八萬四千人の天女が化粧を落として地面に一齊に胭脂をぶちまけたようだと描寫し、すさまじい落花の様に半ば放心しつつ、しまいに狂おしくも一年中落花をふらす海棠を冀うに至る。

さて、以上にあげた詩例から、龔自珍が海棠の開花よりむしろ落花に強い共感と愛着とを示すことが明らかにされた。一體どうして彼はこのような偏向した好みを見せるのだろうか。それは彼の單なる奇癖にすぎないのだろうか。この問題に一つの示唆を與えてくれるものとして、私は官僚であつた龔自珍の落魄意識との密接な關連に注意しておきたいと思う。すなわち、龔自珍は二九歳の時に舉人の資格で内閣中書となり、官界勤めを始めるのであるが、性來高言放談を好む彼の性格も禍いして責任ある地位に昇官することは容易でなかつた。度重なる科擧失敗のあと三八歳でやつと進士にパスした履歴や、宗人府主事・禮部祠祭司主事など、さほど高くない官職に終始甘んじた經歷はその現れである。そのことへの憤懣は、彼自身も詩作の至るところで吐露している。一例をあげれば、「十月廿夜、大風不寐。起而書懷」の詩では次のように自嘲自諷的に自己の姿を浮き彫りにする。

平生進退兩顛簸

平生は進退兩つながら顛簸き

詰屈内訟知緣因

詰屈 内に訟えて緣因を知る

側身天地本孤絕

身を天地に側め 本より孤絶す

矧乃氣悍心肝淳

矧んや乃ち氣は悍 心肝は淳なるをや

欹斜譎浪震四座

欹斜譎浪 四座を震わし

卽此難免羣公瞋

卽ち此をもて群公の瞋るを免れ難し

『己亥雜詩』においても其四四から其五三に至る十首を中心として、官僚龔自珍の華々しい活動、及びそれに伴なうみじめな敗北が活寫されているが、その考察は後述する。そして、「西郊落花歌」をはじめとして、先にあげた「京師春盡夕……」「棗花寺海棠下……」など海棠の落花に感動する詩が多く作られた三五、六歳の頃は、彼が實に通算五度にわたる會試に連續失敗して、怏怏として樂しまない日々を送っていた時期なのである。このように考えてくれば、龔自珍がとりわけ海棠の花を好み、それを「薄命花」（城北慶園將起屋……）といひ、「斷腸花」（菩薩墳）と述べ、あるいは「身世依然是落花」（滅蘭）と表現しながら海棠花に強い關心を示し、かつ「西郊落花歌」などのように落花の海棠に深く感動した背景には、彼自身の官僚としての落魄意識が濃厚に働いていたことが推察される。

三

では、龔自珍が官吏であることを辭めた直後に詠まれ、結果的に詩人としての最後の詩集となつた『己亥雜詩』においては、ここに述べ來つた花、及び落魄意識はどのように現れているだろうか。『己亥雜詩』三一五首中、何らかの形で花に言及する詩は都合五十首にのぼる。約十六%、量としては多くない。しかし量の多さと質の深さとは比例しない。問題とすべきは質の深さ、つまり龔自珍が何故「花」とりわけ「落花」に藉りて己が心情を吐露しなければならなかつたか、その必然性の考察であらう。

このような考えから『己亥雜詩』において龔自珍が花に言及する詩を見てゆくと、例えば其一九二は次のように表現する。

花神祠與水仙祠 花神祠と水仙祠と

『己亥雜詩』に現れた龔自珍の「落花」意識

欲訂源流愧未知 源流を訂めんと欲するも愧らくは未だ知らず
但向西冷添石刻 但だ西冷に向つて石刻を添え

駢文撰出女郎碑 駢文もて女郎の碑を撰出するのみ

彼は「花神祠」や「水仙祠」の名稱を持つ杭州西湖畔の廟祠の由來に關心を寄せているが、これは前述「因憶」で槐花や山桃花を詠んだと同じく、彼の花に寄せる淡い慕情を示すものである。因みに花神祠とは一七三九（雍正九年）、李衛の建立になる廟祠と思われ、『杭州府志』卷十一、また『東華錄』卷九・卷三五、この詩はその背景に會て西子湖畔に住んだ名妓蘇小小を意識している。

次に、『己亥雜詩』に花を詠んだ詩が集中して現れるのは、其二〇四から其二〇九に至る一連の六首である。彼はここで、自分が官僚生活を送つた北京の花の思い出を次のように歌う。

可惜南天無此花 惜しむ可し 南天に此の花無し

腰身略似海棠斜 腰身は略ぼ海棠の斜なるに似たり

難忘槐市街南宅 忘れ難し 槐市街南の宅

小疏羣芳稿一車 小んじ疏んず 群芳 稿一車なるを

（其二〇四 京師の鬮枝花を憶ふ）

可惜南天無此花 惜しむ可し 南天に此の花無し

麗情還比牡丹奢 麗情還お牡丹の奢れるに比す

難忘西掖歸來早 忘れ難し 西掖より歸り來ること早く

贈與妝臺滿鏡霞 妝臺に贈與すれば滿鏡霞し

（其二〇五 京師の芍藥を憶ふ）

不是南天無此花 南天に此の花無きにあらず

北肥南瘦二分差 北は肥え南は瘦せ 二つに分差す
願移北地燕支社 願はくは北の地燕支の社を移して
來問南朝油壁車 來たり問はん南朝油壁の車

(其二〇六 海棠を憶ふ。)

弱冠尋芳數歲華 弱冠 芳を尋ねて歲華を數え
玲瓏萬玉婢交加 玲瓏たる萬玉に婢も加う
難忘細雨紅泥寺 忘れ難し 細雨ふる紅泥の寺
溼透春裘倚此花 春裘を濕透して此の花に倚りしを

(其二〇七 丁香を憶ふ。)

女牆百雉亂紅酣 女牆百雉に亂紅 酣なり
遺愛は眞に召伯の甘きに同じ
記得花陰文宴屢 記し得たり 花陰に文宴屢にして
十年春夢寺門南 十年の春夢 寺門の南

(其二〇八 豐宜門外花之寺の董文恭公手植の海棠を憶ふ一首。)

空山徙倚倦游身 空山に徙倚す倦游の身
夢見城西閫苑春 夢に見る城西閫苑の春
一騎傳賤朱邸晚 一騎賤を傳う朱邸の晩
臨風遞與縞衣人 風に臨んで縞衣の人に遞與す

(其二〇九 宣武門内太湖の丁香花を憶ふ一首。)

この六首は、龔自珍が故郷の杭州にいる間に詠まれている。旅終えて、ゆっくり故郷に靜養する間に、彼がふと長年月を過ごした京師の

生活を花に託して回顧するのは、やはり彼の花好みを反映するものであろう。また、其二〇六及び其二〇八に如實に示されるように、龔自珍が海棠の花を好み、満開の海棠よりも落花の海棠に感動のポイントを置くことは、前節で私が述べてきた通りである。

さて、『己亥雜詩』において龔自珍の落花の意識を表明したものとして異彩を放つのは、其三及び其五に見える表現である。

罡風力大簸春魂 罡風力大しく春魂を簸り
虎豹沈沈臥九關 虎豹沈沈として九關に臥す
終是落花心緒好 終に是れ落花の心緒好し
平生默感玉皇恩 平生默かに感ず玉皇の恩

この詩は、官僚として遂に志を得ないまま空しく敗殘の旅立ちにあたり、自分がかねて憧れていた天上の神仙世界が今の自分の落魄意識にびったりとそぐうものになったことを述べる。轉句の「終是落花心緒好」とは自諷的反語表現とみられる。

浩蕩離愁白日斜 浩蕩たる離愁 白日斜めなり
吟鞭東指即天涯 吟鞭東を指せば即ち天涯
落紅不是無情物 落紅は無情の物ならず
化作春泥更護花 化して春泥と作り更に花を護らん

この詩では、限りなき憂愁に苛まれる龔自珍が、今後は自ら土塊となって次代の花を育てようと餘生に一縷の希望をつなぐ心境の展開の様子が描かれる。そして、ここに彼が自分の姿を落花に託して述べた「終是落花心緒好」「落紅不是無情物 化作春泥更護花」という表現は、『己亥雜詩』全三一五首の中において、彼が旅立ちにあたって胸中に湧き起る總序的な情感を述べたとおぼしき冒頭十首中に現われる表現であるという点からも重要な意味あいを持つてくる。冒頭の十首

において、眞自珍は、自分自身を「どんな険しい山河にも窮すること
を知らない古將軍」(關河不窘故將軍)だと描寫し、一方その古將軍たる
自分を「鏡を見れば強半は尙お紅顔」(鏡中強半尙紅顔)だとらえる。
そして勇ましくもまだ童顏の残る四八歳の自分は、「口から出まかせ
の言葉が泉のように湧き」(不奈屈言夜湧泉)、「長年の煩悶(百年心事)歸平
淡」に日夜苦しむことになる。また一官僚としては「出處進退に悠々
然としておれず」(進退雍容史上難)、ついに「涙をぬぐって北京を出る」
(忽收古淚出長安)のであり、とどのつまりは「獨りでこの世に出て來
て竟に又一人で故郷に歸ってゆく」(獨往人間竟獨還)のである。こう
いう心境にあった眞自珍にとって、其二六で「逝矣斑駁宵落花」(逝矣
斑駁宵落花を宵め)といい、あるいは又其二七で「野棠花落城隅晚」
(野棠の花落つ城隅の晩)というように、彼が出都した時期がちょうど
落花の時節に當っていたことは、感受性の強い彼の落魄した心情をい
やが上にも驅り立てたものと思われる。

一官僚の眞自珍が官界において獅子奮迅する様は、先に述べたよう
に『己亥雜詩』其四四から其五三に至る一連の十首中に如實に描かれ
ている。ここでは一例として其四九をあげる。

東華飛辯少年時 東華に辯を飛ばす少年の時

伐鼓撞鐘海内知 鼓を伐ち鐘を撞ち海内に知らる

牘尾但書臣向校 牘尾に但だ「臣向校す」と書するに

頭銜不稱網其詞 頭銜稱はず 其の詞を網がら

(國史館に在る日、總裁に上書し、西北塞外部落の原流、山
川の形勢を論じ、『一統志』の疏漏を訂す。初め五千言あ
り。或るひと曰く、職する所に非ざるなりと。乃ち二千言
を上す。)

『己亥雜詩』に現れた眞自珍の「落花」意識

このように、眞自珍は官界において、身は廉位であるにもかかわら
ず果敢に上書活動を行ない、自分の信念に忠實に、ひたすら誠實に行
動しようとするのである。そして、その彼が、官界という己の活動の
最大の根據地を失った直後の旅立ちにあたって、「終是落花心緒好」
「落紅不是無情物 化作春泥更護花」と落花に託して感懷を述べるの
は、容易に想像されるように、官界にあって苦闘するもままならず、
空しく敗殘の身を故郷に退く彼自身の姿を日頃愛する落花に喩えて表
現したものであるということが出来る。

四

しかしながら、『己亥雜詩』に現れた眞自珍のこの落花の意識は、
失意と絶望のみを意味するものではない。それは、自ら竟に一片の落
花たるにすぎないことを十分に甘受しつつ、その半面に、なお土くれ
となつて更に次の世代の花を育てたい(化作春泥更護花)という積極的
意志が働いているからである。彼のこの悲願は、其二二七にも次のよ
うに現れる。

賸水殘山意度深 賸水殘山に意度深し

平生幾緇屐難尋 平生 幾緇の屐 尋め難し

栽花鄭重看花約 栽花は鄭重にして看花は約す

此是劉郎遲暮心 此れぞ是れ劉郎の遲暮の心

その起句において「亡國の山河に思ひは深し」と亡國の悲哀をうた
いおこしながら、その轉句と結句では「花看るよりも花育て、これが
私の老い心」という具合に、やはり花に託して美花の鑑賞すなわち看
花よりも美花の育成すなわち栽花の方へ心を寄せるのは、彼自身の落
花の悲願が現れたものである。ついでには其三〇二及び其三〇三のよ

うに、龔自珍が來たるべき世代の花とみたてた長子の龔昌範に對して、「決して名士にならうと思ふな」(莫拋心力質才名)、「五經によく習熟し 私みたいな九流かじりになるな」(五經爛熟家常飯 莫似而翁廢九流)と叱咤激勵しているのも、實は龔自珍の次代に望みを託す同じ意圖から出ていると考えることができる。

雖然大器晚年成 大器は晩年に成ると雖も

卓犖全憑弱冠爭 卓犖は全く弱冠の争いに憑る

多識前言畜其德 多く前言を識り其の徳を畜へ

莫拋心力質才名 心力を抛ちて才名に質うる莫れ

(其三〇二)

儉腹高談我用憂 儉腹にして高談 我れ用て憂う

肯肩樸學勝封侯 肯て樸學に肩するは封侯より勝れり

五經爛熟家常飯 五經に爛熟すること家常の飯なり

莫似而翁廢九流 而が翁の似く九流を廢る莫れ

(其三〇三)

以後は専ら裁花にたずさわりたいという龔自珍のこの氣持は、また現實にも彼のその後の行動となって現れるのであり、故郷へ歸つた後の彼は、丹陽の私塾である雲陽書院に教鞭をとりながら、ひたすら次の世代の花の育成に力を注ぎ、かくしてその五十年の生涯を閉じることになる。この年一八四一(道光二一)年、時あたかも中國近代の開幕を告げるアヘン戦争勃發の翌年であった。

それでは龔自珍のこのような強い「落花」肯定の姿勢は一體どこから來るのであるうか。それは單なる敗者の虚勢にすぎないのであるうか。今、「己亥雜詩」に現れた龔自珍の「落花」意識の淵源に溯ろう

とする時、私は龔自珍が若年に書いた一つの論文を想起する。それは「尊隱」である。残念なことには「尊隱」は書かれた正確な年代がはつきりせず、ただ「己亥雜詩」其二四一の次の記事によつて、その「少年」時に書かれたことが推定されるほか、「尊隱」に言及した龔自珍の詩文は見當らない。

少年尊隱有高文 少年 「尊隱」に高文有り

猿鶴真堪張一軍 猿鶴 眞に一軍を張るに堪えたり

難向史家搜比例 史家に向りては比例を搜し難し

商量出處到紅裙 出處を商量して紅裙に到る

『己亥雜詩』のこの記述は、若年の一切を捨てて歸郷の途次にある四八歳の龔自珍が、今尙お若年の「尊隱」を自分の得意の傑作と見ていたことの明らかな證據である。では「尊隱」に現れた龔自珍の思想とはどのようなものであろうか。「尊隱」において、龔自珍は時の推移を三分して考へる。それは一年について言へば發時(春)・怒時(夏)・威時(秋冬)であり、一日について言へば蚤時(朝)・午時(晝)・昏時(夕)である。「尊隱」の正文は、以下この區分に從つて京師と山中の變容を對比しつつ敘述が進められる。そして龔自珍の主張の力點は、一にかかつて「山中の民」である隱者が勢力を得るとき、即ち「昏時」にあることは言うまでもない。昏時においては、天下の趨勢が京師から山中へと次第に移りゆき、蚤時・午時に京師優勢であった形勢が逆轉して、遂にはそれまで劣勢であった山中の民が大音聲を放つて蹶起するに至る様子が描かれている。私は、「尊隱」に描かれたこのような山中の民すなわち隱者尊重の意識は、今京師から山中へ退隱しようとする龔自珍の落魄意識を支え、のみならず積極的に肯定するバックボーンとなつて機能したのではないか、と考へたい。むしろん

「尊隱」を書いた「少年」の日から『己亥雜詩』を詠んだ「己亥」の年までには數十年の懸隔があり、この間に龔自珍自身の思想も變化發展したであろうことは十分に想像される。しかし先の『己亥雜詩』其二四一に見える「少年尊隱有高文」という詩句が、その數十年の懸隔を経て今なお「尊隱」を彼の得意の傑作として回顧しているところからみると、「尊隱」に現れた隱者尊重の意識と『己亥雜詩』に現れた落魄意識とは表裏一體の關係にあつたと考えられるのである。

五

では最後に、『己亥雜詩』に現れた龔自珍のこのような「落花」の意識は、當時の中國の歴史の推移の中ではどのような意味を持つてくるであろうか。自ら泥土と化した落花として次代の後繼者に望みを託すという龔自珍の悲願は、その死後、清末から民國初年にかけての中國詩壇において、龔自珍の詩を尊崇し模倣する者が簇出するという現象がおこり、現實化することになる。

その顯著なものは一九〇九年、江南に結成された文學結社「南社」である。南社の詩人に及ぼした龔自珍の影響については、詳しく論及するものに倉田貞美氏の『中國近代詩の研究』（大修館書店・一九六九）がある。小論では一例として柳亞子（一八八七—一九五八）をあげ、龔自珍への傾倒ぶりについて見てみることにする。柳亞子は、その生没年が示すように、清末中國に生を受け、近代から現代に至る中國の激しい變動を自ら具に體驗して生きてきた詩人である。現代中國においては毛澤東（一八九三—一九七六）や郭沫若（一八九二—一九七八）らとの贈答詩によつても内外に名を馳せる。彼は南社の創設者の一人であり、その領袖として終始リーダーシップをとり、當時の所謂革命思想

『己亥雜詩』に現れた龔自珍の「落花」意識

を鼓吹するのに大いに貢獻した。彼が詩人としての才能を開花させたのは、まさしく南社においてであつた。柳亞子が若年に龔自珍に大いに傾倒していたことは、例えば一九〇八年、二二歳の時に、次のように明末の夏完淳（一六三一—一六四七）・清初の顧亭林（一六一三—一六八二）と並んで龔自珍を追慕した詩を詠んでいることによつてこれを伺うことができる。

定庵に三別好詩有り。余、其の意に倣つて論詩三截句を作

る。

三百年來第一流 三百年來 第一流

飛仙劍客古無儔 飛仙 劍客 古より儔無し

只愁孤負靈籥意 只だ愁ふ 靈籥の意に孤負そむき

北駕南巒到白頭 北駕し南巒して白頭にそむるを

また一九一二年、南社同人である黃侃（一八八六—一九三五）の北上

するを送つて詠んだ詩「送黃季剛北上、集定公句」は、全句をことごとく龔自珍の詩から引用した龔自珍集句である。彼の龔自珍に寄せる

關心は、中華人民共和國成立後も依然として續いていたようであり、

一九四九年、劇作家の曹禺（一九〇九—、本名は萬家寶）らと共に

山東省の益都市に赴いた時には、曹禺の姓が萬、自分の姓が柳である

ことから、當地の舊址である萬柳堂の名に因み、龔自珍の「訪萬柳

堂址」の韻を借りて七絶一首を撰している。更に一九五〇年には、「集

龔一首」において龔自珍詩の集句を試みている。こうして柳亞子は言

うまでもなく、その他の南社の同人にも或は龔自珍詩を模倣し、或は

龔自珍詩の集句を試みた詩作例が夥しく存在する。倉田氏の調査によ

れば、南社同人が詠んだ龔自珍集句の中で、龔自珍詩が引用された頻

度数は『己亥雜詩』が最も多く、七三％にものぼるといふ。

次に、清末中國において龔自珍に傾倒した詩人の一人としてあげられる黄遵憲（一八四八—一九〇五）は、龔自珍とはほゞ一代隔てて後出した詩人である。つとに吳宓が『空軒詩話』において、黄遵憲の詩作に影響を与えた四源として、漢魏樂府・杜甫・吳梅村と並んで龔自珍をあげていることからわかる通り、黄遵憲の詩には明らかに龔自珍の詩に據ったと思われる詩表現がしばしば見られる。今試みに、錢仲聯の『人境廬詩草箋註』（古典文學出版社・一九五七）を参照して、その類似表現を抽出すれば次の通りである。

- ① 黄の「倘既消磨不自禁」（爲詩五悼亡作）は、龔の「風雲才略已消」（己亥雜詩 其二五二）磨に據り、
- ② 黄の「百千萬樹櫻花紅 一十二時僧樓鐘」（不忍池晚遊詩）は、龔の「二十三度谿花紅 一百八下西谿鐘」（己亥雜詩 其一九六）に據り、
- ③ 黄の「爐香鼻處瓶花側」（不忍池晚遊詩）は、龔の「瓶花帖妥爐香定」（午夢初覺、悵然詩成）に據り、
- ④ 黄の「萬綠沈沈噀一蟬」（不忍池晚遊詩）は、龔の「萬綠無人噀一蟬」（己亥雜詩 其二一一）に據り、
- ⑤ 黄の「爐烟帖妥窗紗靜」（不忍池晚遊詩）は、龔の「瓶花帖妥爐香定」（午夢初覺、悵然詩成）に據り、
- ⑥ 黄の「又聞淨土落花深四寸」（櫻花歌）は、龔の「又聞淨土落花深四寸」（西郊落花歌）に據り、
- ⑦ 黄の「天雨新好花 長是看花時」（櫻花歌）は、龔の「安得樹有不盡之花更雨新好者 三百六十日長是落花時」（西郊落花歌）に據り、
- ⑧ 黄の「一燈絮絮話家常」（海行雜感）は、龔の「米鹽種種家常話」（己亥雜詩 其一六）に據り、

⑨ 黄の「掌心發雷聲」（紀事）は、龔の「掌中雷者、神寶君說洞神下乘法、所謂役令之事」（王仲瞿墓表銘）に據り、

⑩ 黄の「猶能令我顏丹鬢綠不復齒髮嗟凋零」（放歌、用前韻）は、龔の「我能令公顏丹鬢綠而與年少爭光風」（能令公少年行）に據り、

⑪ 黄の「召我來咨諏」（題樵野丈運覺齋話別圖）は、龔の「異時就我來諮諏」（常州高材篇、送丁若士履恆）に據り、

⑫ 黄の「偶爾栽花偶看花」（己亥雜詩 其十二）は、龔の「栽花鄭重看花約」（己亥雜詩 其二二）に據り、

⑬ 黄の「夢回小坐淚潸然」（己亥雜詩 其八）は、龔の「夢回清淚一潸然」（午夢初覺、悵然詩成）に據り、

⑭ 黄の「說向粧臺供媚妾」（己亥雜詩 其二九）は、龔の「甘隸粧臺何眼波」（己亥雜詩 其二五二）に據り、

⑮ 黄の「後二十年言定諛」（己亥雜詩 其四七）は、龔の「五十年中言定諛」（己亥雜詩 其七六）に據り、

⑯ 黄の「四百由旬道路長 忽逢此老怨津梁」（己亥雜詩 其五一）は、龔の「過百由旬烟水長 釋迦老子怨津梁」（己亥雜詩 其九〇）に據る。

これからみても、黄遵憲の詩には明らかに龔自珍の詩に據ったと思われる詩表現が頻出し、しかもそれは『己亥雜詩』からの引用が多いことがわかる。このような事實に基づけば、一八九九（光緒二五）年、五二歳の黄遵憲が、やはり同名の『己亥雜詩』七絶八九首を詠んだ時、彼は龔自珍の『己亥雜詩』を十分に意識していただろうことが想像される。ここにあげた黄遵憲『己亥雜詩』における龔自珍『己亥雜詩』に依據した表現例（⑩⑬⑭⑯）はその有力な證左となるものであるが、そのことは、友人の梁啓超（一八七三—一九二九）も『飲冰室詩

「話」において、次のように兩者の關連を示唆するところである。

龔定庵に『己亥雜詩』三百六十首有り。近世の文學者は喜んで之を誦すと云う。近頃人境廬主人も亦た『己亥雜詩』數十首有るを見る。蓋し主人一生の歴史の小影なり。

このように黄遵憲や柳亞子をはじめとして、清末から民國初年にかけての中國詩壇に龔自珍の及ぼした影響は大きなものがあつた。

また單に詩方面のみならず、學術思想方面においても龔自珍は清末の一時期に確かに大きな存在としてあつたことは、同じく梁啓超の『清代學術概論』が之を記録する。

晚清思想の解放に、自珍は確かに與つて功有り。光緒間の所謂新學家は、大率の人人皆龔氏を崇拜するの一時期を經過せり。初めて『定庵文集』を讀むに、電を受くるが若く然りなるも、稍や進めば乃ち其の淺薄を厭う。然れども今文學派の開拓は實に龔氏自らす。

更に、保守派思想家である張之洞（一八三七—一九〇九）の次の記事も、學敵としての龔自珍の存在を苦々しく回顧することによつて、逆に都下に鳴つた龔自珍の影響を確認するものである。

二十年来、都下、經學は公羊を講じ、文章は龔定庵を講じ、經濟は王安石を講ず。皆餘の出都以後の風氣なり。遂に今日有るは傷まじき哉。

このように、清末の一時に龔自珍が大きな足跡を残したという歴史事實を踏まえた上で、今一度『己亥雜詩』に現れた龔自珍の「落花」意識を振り返つてみることにしよう。龔自珍は『己亥雜詩』其一〇四で、

河汾房杜有人疑 河汾（王通）は房（玄齡）・杜（如晦）に人の疑

『己亥雜詩』に現れた龔自珍の「落花」意識

有りて

名位千秋處士卑 名位は千秋に處士として卑し

一事平生無齟齬 一事のみ平生に齟齬無きは

但開風氣不爲師 但だ風氣を開き師と爲らざりしこと

（豫は生平、門弟子を蓄へず。）

というように、「自分は但だ新しい風潮を開くだけで人の師とはならなかつた」と自嘲してはいるものの、現實の歴史發展の中では多くの後繼者が輩出しているという事實によつて、彼は確かに清末民初における一人の偉大な師として機能したといふことができる。あたかも近代中國の幕開けとなつたアヘン戦争勃發前夜の中國にあつて、龔自珍は『己亥雜詩』其七六に

文章合有老波瀾 文章合に老波瀾有るべし

莫作鄱陽爽濤看 鄱陽（馬端臨）・爽濤（鄭樵）と作して見る莫れ

五十年中言定驗 五十年中 言に定らず驗あらん

蒼茫六合此微官 蒼茫たる六合に此の微官あり

（庚辰の歲、「西域に行省を置くの議」「東南に番舶を罷むの議」の兩篇を爲す。之を合刊せんと謀る者有り。）

と述べ、「五十年以内に私の發言はきつと實行される」ことを信じて疑わなかつたのであるが、果してその後、光緒帝は左宗棠（一八一二—一八八五）・劉錦棠（？—？）らの建議を容れ、一八八四（光緒十）年、邊疆の守りとして新疆地方に行省を置くことに承認を與える。奇しくも龔自珍が『己亥雜詩』其二三二において、「詩諷吾生信有之」（詩諷は吾生これ有るを信ず）と信じていた通り、詩諷すなわち詩による豫知が見事的中したのである。更には、先の「尊隱」に述べられた「山中の民」の蹶起場面の描寫も、その後を引き續く太平天國の亂の

勃發を豫知した詩識として論ずることもできるであろう。

こうして龔自珍没後の中國は、アヘン戦争——太平天國の亂——清佛戦争——日清戦争——戊戌政變——義和團の亂と續く一連の政變を経て、一九一一年、孫文（一八六六—一九二五）を首領とする辛亥革命の成功に至って、ようやく封建官僚體制の中國が打倒され、近代意識にめざめた共和政體の中國へとその歴史過程を踏み出すことになる。さて龔自珍は、詩人としての最後の詩集『己亥雜詩』において彼自らがそうありたいと願ったように、泥土と化した一片の落花として能く次代の花を育成したといえるであろう。

註(1) 『己亥雜詩』三一五首中の番號。王佩詩の校訂になる『龔自珍全集』

(中華書局 一九七四)に據る。以下同じ。

(2) 『光緒順天府志』卷一六參照。同著には又、崇勅寺の海棠は吳嵩梁（一七六六—一八三四）が移植したものだとする。吳嵩梁は、本文第二節に引用した「京師春盡夕、大雨書懷、曉起東比鄰李太守威、吳舍人嵩梁」の詩例が示すように、龔自珍の友人の一人である。

(3) 晉の阮孚の故事を用う（『晉書』卷四九）。吉川幸次郎博士の御指教による。この箇所のみならず、博士には數々の御指教を賜わり、感謝に堪えない。

(4) ここで龔自珍が長子に喩す口調は、奇しくも二七年前、弱冠二二歳の龔自珍が、外祖父の段玉裁（一七三五—一八一五）に趨庭の訓を受けた際の口調に酷似する。段玉裁の『經韻樓集』卷九におさめる「懷人館詞序」によれば、段玉裁は填詞に心を寄せる愛孫の龔自珍に對して、先君の遺訓を引用しつつ、「是れ（＝填詞）經史を治むる性情に害有り。之を爲すこと愈よ工なれば、道を去ること愈よ遠し。」というように、填詞から經史學への轉換をせまる。同じく「與外孫龔自珍札」には、「博聞強記・多識善徳して努力して名儒と爲れ、名臣と爲れ。名士と爲らん

と願ひ勿れ。何をか有用の書と謂わん。經史是れなり。」というように、龔自珍に對して、名士となることをあきらめて經史の學に精進して名儒名臣となるように勵ましている。なお、經學者段玉裁と詩人龔自珍との間にあつた經學あるいは填詞に對する意識の乖離については、拙稿「龔自珍における詩の原理」及び「乾隆時代と龔自珍」（『中國文學論集』第五號及び第六號）を参照されたい。

(5) 「尊隱」については、島田虔次氏（仁井田隆博士追悼論文集第一卷『前近代アジアの法と社會』勸業書房 一九六七）・本田濟氏（中國文明選10『近世散文集』朝日新聞社 一九七二）及び伊東昭雄・丸山松幸氏（『原典中國近代思想史』第一冊 岩波書店 一九七六）らの諸氏に、注釋及び邦譯がある。

(6) 彼のこの區分法は、一八一九（嘉慶二四）年、二八歳の龔自珍が當時の有名な公羊學者劉逢祿（一七六六—一八二九）と邂逅して以來、急速に傾倒の度を深めていった春秋公羊學の所謂三世說を連想させる。もしこの區分法が直接に公羊學の三世說に影響されてきたものだとするれば、「尊隱」製作の年代についてもある程度の示唆が得られることになる。しかし、龔自珍が二四、五歳の時に撰した「乙丙之際箸議」の論文に、既に「治世」「亂世」「衰世」の語が使われていることは、島田虔次氏はじめ従來の論者がしばしば指摘してきた通りである。

(7) 『柳亞子詩詞選』（人民文學出版社 一九五六）を參照。

(8) 龔自珍の原詩は、「雜詩、己卯自春徂夏、在京師作、得十有四首」と題する連作詩の一である。

萬柳堂前一柳無 萬柳堂前一柳無
詞流散盡散樵蘇 詞流散盡し 樵蘇も散ず
山東不少升平相 山東に升平の相少なからず
爲朔前茅馮益都 爲に朔る 前茅の馮益都（溥）

（同人 萬柳堂址を訪ふ）

なお、清初の詩人朱彝尊（一六二九—一七〇九）に「萬柳堂記」がある（『曝書亭集』卷六六）。

- (9) 本文第二節参照。
- (10) 本文第二節参照。
- (11) 本文第四節参照。
- (12) 錢仲聯はこの箇所指摘を佚す。今補う。
- (13) 本文第五節参照。
- (14) 丸山松幸氏の『異端と正統』（人物中國志 2 毎日新聞社 一九七五）も同様に指摘する。
- (15) 『張文襄公全集』卷二二七におさめる「學術」と題する詩の自注。